



松田陣平
松田陣平

松田陣平
有明風鹿

DETECTIVE CONAN
*
WORLD TRIGGER

UNOFFICIAL
DREAM FANBOOK
PRESENTED
BY BLUE ROSE



俺の父ちゃんは松田陣平

ボーダーラインをひとつ飛び

有明風鹿

俺は松田翔平。高校生だったはずが、いつのまにかコナンの世界に転生していた。松田陣平の息子として、時に爆弾を解体したり、少年探偵団と事件を解決する日々。今日も少年探偵団と遊びにいくために家を出たのに、気づけば知らない世界に紛れ込んでいた。近界民に襲われ絶体絶命のピンチを救ったのは父ちゃんたち。しかし、彼らは翔平なんて知らないという。二十一歳の父ちゃんの元に転がり込んだ翔平は、ボーダーの隊員と共に近界民と戦う世界を謳歌する。トリガーを使って遊んだり、伊達隊の隊服を着てみたり、近界民に襲われたり…。顔も名前も同じだが、年齢も生き方も違う彼らと翔平が織りなす七日間の不思議な出会い――。

もくじ

一日目・・・・・・・・ 3

二日目・・・・・・・・ 75

三日目・・・・・・・・115

四日目・・・・・・・・159

五日目・・・・・・・・187

六日目・・・・・・・・221

七日目・・・・・・・・261

あとがき

本書は個人的に作られた非公式ファンブックであり、原作者様、出版社様とは一切関係ありません。
名探偵コナン『松田陣平』を中心とした夢小説です。
過去捏造、クロスオーバー、夢主名前有り（男主）となっております。読了後の苦情等とはご遠慮願います。
また、ネットオークション、フリマアプリ等への転売、無断転載、無断複製はご遠慮願います。

俺の父ちゃんは松田陣平

ボーダーラインを ひとつ飛び

有明 風鹿



Blue Rose

俺は松田陣平の息子、松田翔平。普通の高校生だったはずの俺は、いつのまにか松田陣平の息子として転生していた。松田陣平といえは、三つの顔を持つことやそのカッコよさで一躍有名になった安室透、基降谷零の警察学校時代の同期であり、原作ではすでに死んでいるはずだった。しかし、父ちゃんは例の爆弾事件に巻き込まれたものの偶然にも俺が病院の爆弾を見つけたことで爆弾と心中することを回避。今も元気に刑事課で働いている。そして、俺は小学一年生として帝丹小学校に通い少年探偵団に仲間入りし、殺人事件に遭遇したり、爆弾を解体したり、この世界らしくそれなりに事件に巻き込まれる生活を送っている。

「今日の予定は？」

鏡の前でネクタイを結ぶ父ちゃんに聞かれた。今日は日曜日なので学校はなく、俺は休みだ。しかし、父ちゃんは暦通りの休みではないため今日も出勤する。いつものスーツ姿で立つ父ちゃんはちらっと時計に目を向けた。もうそろそろ出ないといけない時間なんだろう。

「今日は元太たちと遊ぶ約束してる」

「そうか。事件に首突っ込むじゃねえぞ」

「今日は少年探偵団のほうじゃなくて、みんなでサッカーするだけだからたぶん大丈夫！」

絶対と言えないのが残念なところだが、俺たちが事件に首を突っ込むんじゃない。事件が俺たちのほうにやってくるんだ。だからしょうがないと割り切っている。

しゅるりとなれた手つきでネクタイを結んだ父ちゃんがカバンを手を取った。そのまま玄関へ一緒についていく。踵のすり減った革靴に足を突っ込んだ父ちゃんは俺へと向き直った。

「なんかあつたら？」

「すぐに電話する！」

「よし。気をつけて行けよ」

「うん。父ちゃんも！ いってらっしゃい」

いってきます、と言って父ちゃんが俺の頭を撫でていく。手を振って見送り、俺はすぐさまベランダへと走った。ベランダの折り畳み椅子を広げてそこに乗り、下を覗き込む。落ちないように気をつけながら下を見続けていると、やがて父ちゃんがマンションから出てきた。そして上を見上げたので、手を降る。父ちゃんは片手をあげると、駐車場の方へむかつていった。

俺も遊びに行くための準備をする。といつても、遊ぶときに必要なものは探偵バッジ、子供ケータイ、そして

家の鍵だけだ。リュックを持つまでもない。鍵以外のものをポケットにいれ、鍵は首から下げる。

「いつてきます！」

玄関で、誰もいない家に声をかけてから家を出た。鍵を開めるのも慣れっこだ。普段子供があまり持たせてもらえない鍵を持っていることは、子供たちの中ではステータスの一つだった。これだけで少し羨ましがられたりする。その鍵を大事に洋服の中に仕舞えば準備万端だ。

天気は快晴。絶好のサッカー日和だ。向かう場所は家から歩いて十五分ほどのところにある河川敷だ。そこで集合になっている。ボールはコナンが持ってきてくれるだろう。なくても、コナンのベルトがあればあつという間に作り出せるから便利だ。

俺は意気揚々と駆け出し、河川敷へと向かった。もう何度も行ったことがあるし、地元なので迷うことはない。

迷うことはないはずだったのだが、ふと気がつくと思知らぬ場所にいた。周りを見回せば、見覚えのない建物が並んでいる。往來に人影はなく、ひっそりとした住宅街だ。いつもの道を走っていたはずなのに、なぜ知らない場所にいいのかと首を傾げる。

「どこだ、ここ……？」

近くの電柱を見てみれば、三門の文字が書かれていた。このあたりに三門町なんてあったのだろうか。

「俺、そんなに方向音痴だったけ？」

今まで遊びに行く時に道に迷ったことはない。冒険するために見知らぬ道に入ることはあるが、今日はそんなこともしていない。なのに知らない町についてしまったことに戸惑う。とりあえず、搜索願いを出して見るべきか、と胸元の探偵バッジに手をかけるが、いくら応答を願っても誰も反応してくれなかった。

「壊れた……？」

ならば、と携帯電話を手にとるがなぜか圏外になっている。こんな街中で圏外ってどういうことだ。

仕方がないので、公衆電話を探すが、自力で家まで戻ってみることにした。走ってきた方向へ回れ右して、歩き出し。今度は周りの景色を観察しながら歩くことにする。

そうして歩く中で気付いたのだが、どの家もなぜか生活感がなかった。人の気配が全くしないのだ。これだけ歩いていれば住民の一人二人や、窓の向こうに人がいる気配だとかを感じそうなのだが、それらが無い。まるで人間がごっそりといなくなってしまうみたいで、ゾッとする。

なんだか怖くなってきて、壁際によりながら歩いていると不意に開けた場所に出た。そこは今まで家が立って

いたであろうことはわかるが、そこにあるのは瓦礫の山だった。他にも、半壊して中が丸見えになっている家もある。火事ではないだろう。瓦礫に焦げた様子はない。地震の影響なら他の家にも被害が出ているはずだ。ならば、何があったのか。ただ取り壊されただけとは思えない光景に、しばし立ち尽くした。

もうしばらく歩くと、そういう家がどんどん増えていく。大通りに出た時、道の先に大きな四角い建物があるのが見えた。その建物の壁には黒いルービックキューブのようなものと「BORDER」の文字が描かれている。結構遠いような気がするが、その巨大さ故に、遠近法が狂ってとても近くにあるようにも見えた。

「でけー……」

ルービックキューブのようなものが描いてあるあたり、オモチャを製造しているところかもしれない。誰もが知る大手のオモチャ屋のようなポップさは欠片もない上に、ロゴ以外に一切の装飾がないため威圧的な雰囲気だった。さながら悪の総本山のようだ。周りの家の何個分もの高さがあるあの建物は、もしかしたら東都タワーにも匹敵する高さかもしれない。あんな高い建物ができたなら話題になっていそうだ。ここにコナンが灰原がいたら解説してくれたかもしれない。

そんなことを考えていた時だった。

俺の上空でバチバチと黒い稲光が弾けた。かと思えばそれは一度収縮し、続いて大きく黒い円が広がった。上空にぽっかりと丸い穴ができたかのように。

「なんだ、あれ……」

ぽかんと見上げてみると、突如、あたりに警報が鳴り響いた。

『^{ゲート}門発生。^{ゲート}門発生。ボーダー基地より全市民に通達します。警戒区域内に門が発生します。市民の皆様はご注意ください』

警報の中、淡々とした女性の声が告げる。まるでその声に誘導されるように、黒い穴の中からのそりと顔を出したのは白い巨大なナニカだった。

ばかりと開けられた口の中にはいくつもの歯があり、黄色い舌の先端には巨大な目がついていた。ソレは穴の中から這い出てくると、きょろりとあたりを見回した。そのとき、初めてあの白い怪物にはウサギの耳のようなものがついているのがわかった。四足歩行のようで、大きな前足をゆつくりと地面に下ろす。着地した瞬間、地面が揺れた。さらに、残りの三本の足を地面に着地させる。大通りとはいえ、その巨体が収まる幅ではなく、少し動くだけで電線を体にひっかけ、電柱をなぎ倒した。バチバチと電線から火花が散っているが、あの怪物は痛

くもかゆくもないらしい。長い首を巡らせ、そして俺と目があつた。

「げ……っ！」

俺の勘が言ってる。逃げなきゃヤバイ。

俺は反射的に回れ右をして駆け出した。あれが何なのかなんてわからないけれど、明らかにロックオンされたような気がする。その勘は正しかったのか、あの怪物は俺を追ってきた。それはあつというまに追いついてきた。そもそも、体の大きさが違うのだから当たり前なのだが、どんどん迫ってくる巨体は恐怖でしかなく、恐怖に足がもつれる。

振り返ればもう真上まで怪物が迫っていた。その怪物は俺めがけて足を振り下ろしてくる。まるで巨大な壁が振ってくるかのような。慌てて前へと飛び込むと、俺の背後でソレは着地した。砂埃が立ち上がり、振り下ろされた先の地面がひび割れている。間一髪だったわけだが、転がった俺はすぐさま立ち上がることもできず怪物を呆然と見上げた。

舌先につけられた大きな目がぎょろりと俺を見下ろす。そして徐々に顔が近づいてきた。

あ、食べられる。

悲鳴もあげられなかった。ずっと開けっぱなしの口の中は真っ暗で何も見えない。だからこそ、余計に舌のよなな目が俺へ向けられているのが気持ち悪い。目を閉じることもできず、俺は地面に大の字に転がったまま、徐々に視界が怪物で埋め尽くされる様を眺めていた。

その時だった。ドカンッと派手な音が鳴ったかと思えば、強い風が吹き付けた。それを理解したときには、俺の体は誰かによつて抱えられていた。怪物の下から抜け出し、辺りが明るくなる。

「よう、坊主。無事か？」

誰かの腕が俺の脇下に入れられている。上から振ってきた声は、とても安心できるもので、無意識のうちに体から力が抜けた。顔をあげれば予想通り、いつものサングラスをかけた俺とよく似た顔の男がニヤリと笑って俺を見下ろしている。しかし、予想と違ったのは今朝見送ったばかりのスーツ姿ではない。水色の首元であるジヤージのようなものを着ていて、胸元には桜が描かれたエンブレムがつけられている。

「……とう、ちゃん？」

疑問形になるのも仕方がないだろう。父ちゃんがこんな格好をしているのを見たことがない。父ちゃんは俺の言葉に不敵な笑みを引つ込め、眉根を寄せた。

「誰が父ちゃんだ！ 誰が！ 俺はまだ二十一歳。ピチピチの大学生で独身だ！」

「アハハハッ、父ちゃん……！ 陣平ちゃんが父ちゃん……っ！」

「いつのまに子供なんて出来たんだ？ 俺たちに知らせないなんて水臭いな。松田」

「ハギは笑いすぎだし、隊長もノるなよ！」

ズシンッ、と音を立てて倒れた白い怪物の上にはいつのまにか、人が乗っていた。班長だ。班長は片手に刀身が光る刀のようなものを持っている。そして父ちゃんと同じ水色のジャージのようなものを着ていた。いつものように爪楊枝をくわえているのだが、その格好はやっぱり奇抜だ。ニヤリと笑いながら、身軽に怪物の上から飛び降りた班長がこちらへ近づいてくる。あの怪物は倒れても二階建ての家くらいの高さがあったのだが、班長は足を痛めた様子もない。いくらタフガイだと言われる班長だって、家の上から飛び降りて無事なのはどう考えてもおかしい。

もう一人、さつきからずっと笑っているのは父ちゃんたちと同じ格好をしたハギさんだった。しかし、ハギさんの手にはアサルトライフルのようなものが握られている。ハギさんは機動隊の爆弾処理班なので拳銃の携帯は認められていないはずだが、どうしたことがか。

周りに集まってきた彼らは、口々に父ちゃんのことを^{からか}揶揄っている。その光景だけを見るならいつもと同じはずなのだが違和感が激しい。

「で、坊主。ここは立ち入り禁止区域だぞ。入ってきちゃダメだろう」

「そう、なの？」

「知らなかったのか？ 一人か？」

班長がいまだに父ちゃんに抱えられている俺と目を合わせるために少し膝を折る。間近で見ると班長も班長に変わりはないのだが、俺のことを坊主と呼んだことに目を見開いた。まるで、知らない子供に接するみたいな呼び方だ。

「班長、何やってるの？ ハギさんも、父ちゃんも。仕事は？」

俺が問いかけると班長は面食らった顔をした。そしてハギさんや父ちゃんと顔を見合わせる。

「坊主が誰と勘違いしているのかは知らないが、俺たちはボーダーだ。あと、俺は班長じゃなくて隊長だな」

「ボーダー？」

なんだそれ、と首を傾げた。